

ダハシュール北遺跡の保存整備計画

矢澤 健*

1. 遺跡の特徴と重要性

(1) 立地と周辺の遺跡

ダハシュールは現在のエジプトの首都カイロから南に約 25km のところにあり、メンフィス・ネクロポリスの中でも南部にあたる。ダハシュール北遺跡はダハシュール地域の中では北部に位置しており、高低差の少ない低位砂漠内において、わずかに高所となっている地点に立地している。ダハシュール北遺跡は古王国時代、中王国時代のピラミッドに囲まれており、遠く北のサッカラやギザのピラミッドまでも望むことができるという壮大な景観を有している。また、ダハシュール北遺跡のすぐ北は南サッカラと呼ばれる地域であり、マスタバ・ファラウンや、ペピ 2 世などの古王国時代のピラミッド、中王国時代のケンジェル王のピラミッドなどが隣接している。

(2) 発見された主な遺構

ダハシュール北遺跡は、1994 年から早稲田大学古代エジプト調査隊と東海大学情報技術センターが共同で行った衛星リモート・センシングによる分布調査、1995 年から 1996 年にかけて行われた現地踏査を経て発見された¹⁾。1997 年に開始した第 1 次調査では、「王の書記イパイ」という人物の新王国時代のトゥーム・チャペル（神殿型平地墓）が出土した。トゥーム・チャペルは日乾煉瓦で建造されており、第 18 王朝末に年代付けられるが、地下最深部から発見された「王の家令、王の書記メス」の花崗岩製の人型棺を始めとして第 19 王朝ラメセス 2 世時代の遺物も発見されており、後世に再利用されていたことが判明した²⁾。

第 7 次調査では、イパイ墓周囲の発掘と同時に、調査区の南東に位置するシャフト 15 の発掘を開始し、2002 年の第 8 次調査まで発掘が継続された。結果としてシャフト 15 は西側の最後部にピラミディオンを持つトゥーム・チャペルを有することがわかり、ピラミディオンに記された碑文から、所有者は「パシェドゥ」という人物であることが判明した。パシェドゥの墓の上部構造には石灰岩の建材が用いられており、建造方法や地下の埋葬施設の構造などから、第 19 王朝ラメセス 2 世治世頃に年代付けられている³⁾。

2004 年の第 9 次調査からは、イパイの墓の約 100m 西側を調査地点として設定した。発掘の結果、付近の岩盤を掘削することによって得られる「タフラ」を地業土とした上部構造の基礎が発見された。平面プランは明確ではなかったが、建築の方法はラメセス朝時代の特徴を有していた。地下の埋葬室から発見された遺物や建材から被葬者が「朗唱神官タ (Ta)」という人物であったことが明らかになった。さらに、「夜の船」を描いたレリーフから、「タ」の埋葬が第 20 王朝に年代付けられる可能性が示唆されることになった。「イパイ」、「パシェドゥ」とその周辺の調査では、新王国時代の第 18 王朝末から第 19 王朝初期までがダハシュール北遺跡の新王国時代の活動年代と考えられていたが、第 20 王朝を視野に入れる必要性が提示された⁴⁾。

2005 年の第 10 次調査から、ダハシュール北遺跡の年代観に新しい視点を加えられることになった⁵⁾。第 10

* 早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員

次調査から「タ」の墓周辺の発掘を開始しており、中王国時代のシャフト墓（明確な上部構造を持たない地下の埋葬室だけの墓）が未盗掘の状態で見出された。墓から発見された箱型木棺の内部にはカルトナージュ製のミイラマスクを身に着けた被葬者が横たえられていた。被葬者の名前は「司令官セヌウ」であり、ミイラマスクの特徴から第13王朝に年代付けられている。「セヌウ」に引き続き、2007年第12次調査には1つのシャフト墓から「セベクハト」、「セネトイトエス」という人物の埋葬が未盗掘で見出された。これらのシャフト墓は「タ」墓の地業土が覆いかぶさった状態だったため、盗掘を免れることができたと考えられる。中王国時代の未盗掘墓の存在は、この遺跡では新王国時代のみならず、中王国時代にも活動が行われていたことを示す有力な証左となった。

また「タ」墓の地業土の下からは、新王国時代の未盗掘墓も見出された。2007年第12次調査には「アメン神殿の職工長ウアイ」、同年第13次調査には「職人チャイ」の埋葬が発見され、深さ約1.5mの土壌に木棺が納められていた。木棺は第18王朝末から第19王朝初期の特徴を有していた。

2008年の第14次調査から2010年の第19次調査まで、引き続き「タ」の墓周辺の発掘が行われた⁶⁾。網羅的な発掘の結果、「タ」の墓周辺では新王国時代と中王国時代の墓が混在している様子が観察された。また、中王国時代の墓はシャフト開口部の長軸方向が南北を向き、新王国時代の墓は東西を向くという傾向が指摘されるに至った。さらに、2008年の第16次調査では「イリセルアア」と「タウブバウマアト」の2人の人物の二重棺が発見され、これらは第20王朝に年代づけられる可能性が指摘された。「タ」の墓も含め、ダハシュール北遺跡の西端付近には新王国時代の末にあたる年代のものが多く認められることがわかってきた。

(3) 遺跡の特質

以上でみてきたように、この遺跡は中王国時代、新王国時代の墓群によって構成される遺跡である。墓には大きく分けて3つのタイプが存在する。1つは「トゥーム・チャペル（神殿型平地墓）」であり、地上に礼拝施設を持ち、地下に竪穴を掘って埋葬室を横方向に掘削して作り出しており、新王国時代第18王朝後期以降に特徴的な遺構である。2つ目は明確な上部構造を持たない「シャフト墓」であり、竪穴を掘り、底から横穴を掘って埋葬室とするもので、中王国・新王国時代の両時代に認められる。「トゥーム・チャペル」の地下構造および「シャフト墓」は、埋葬室を複数有するものや、2層になっているものもある。3つ目は「土壌墓」であり、棺やマットにくるまれた被葬者がちょうど入る大きさに地面を掘りくぼめ、埋葬する形式の墓である。土壌の深さは数10cmから1mに至るものあり、浅い土壌墓についてはしばしば「単純埋葬（Simple Burial）」として過去の報告に言及されている。土壌墓はこれまでのところ新王国時代に年代づけられるものしか発見されていない。

トゥーム・チャペルとして明確に地上の壁体などが発見された例は、これまでのところ3例であり、前述の「イパイ」、「パシェドゥ」、「タ」である。その他にもかつてトゥーム・チャペルの上部構造の基礎となっていたと考えられるタフラの盛り土や、建材がシャフト内から発見された例がある（ex. 吉村、近藤他 2011: 46-49）。しかし、現存する明確な「トゥーム・チャペル」はこの3例だけであり、その他の遺構はほぼすべてが地下に造られたものである。

トゥーム・チャペルをはじめとする新王国時代の墓は、主に古王国・中王国時代のピラミッドを中心とする墓群によって構成されるダハシュール地域ではこれまでになく、発見は画期的な成果であった。近隣で新王国時代のトゥーム・チャペルがあるのは、北約5kmにあるサッカラ、ウナス王のピラミッド参道の南側に位置する墓域であり、ホルエムヘブをはじめとするツタンカーメン王治世の頃の高官墓やラメセス王朝期の墓が発見されている。サッカラの高官墓の存在は当時の行政の中心地であったメンフィスにおける活動が背後にある

と考えられ、ダハシュール北遺跡も類似する特徴を有しており、サッカラとの関係を考慮する必要がある。

一方、中王国時代のシャフト墓群は、これまでに発見された遺物群から、少なくとも第12王朝後期から第13王朝初期という年代幅を有している。当遺跡の南東約1kmのところには第12王朝後期のセンウセレト3世のピラミッド複合体があり、北東約1kmのところには第13王朝のケンジェル王と同時期の被葬者のピラミッド跡がある。当遺跡はこれらのちょうど中間に位置しており、これら2つの遺構との関係が注目されている。また、中王国時代のシャフト墓は明確な上部構造が認められていないが、第12次調査で発見された未盗掘墓シャフト65（被葬者はセベクハトとセネイトエス）では、シャフトの上にタフラによる塚が築かれており、塚には土器片が付着している様子が観察された。すでに盗掘を受けた墓においても塚の一部と思われるタフラの堆積に土器が付着している例が発見された。さらに、第18次調査では地上に建てられていたと推測される大型のステラ型祠堂がシャフト内から発見されるなど、シャフト墓の地上の様相を明らかにする手がかりが増えつつある。既存の調査成果で、同種のシャフト墓地上部の様相を考古学的に確認できた例は乏しく、意義深い発見と言える。

未盗掘墓が多く発見されていることも、この遺跡の特徴の1つと言えるだろう。「タ」のトゥーム・チャペル周辺での発見が多く、トゥーム・チャペルの基礎の盛り土の下に隠れていたことが、奇跡的に未盗掘墓が現代まで残されることになった原因と考えられる。未盗掘墓の墓からはほぼ完全な状態の棺やミイラ、ミイラマスクをはじめとする遺物が発見され、当時の埋葬習慣を明らかにする上で第一級の資料となっている。また、遺構や遺物の出土状況は、埋葬時の状態をそのままとどめているため、当時の葬送儀礼を復元する上で重要な考古学的証拠となる。

(4) ダハシュール北遺跡の重要性

以上に述べてきた遺跡の特質から、ダハシュール北遺跡の持つ重要性は、次のようなものが挙げられる。

①葬送儀礼研究への貢献

ダハシュール北遺跡では全ての墓において詳細な記録を残しているだけでなく、未盗掘墓の発見によって埋葬時に行われた儀式を復元する手掛かりが得られた。さらに、従来の研究では資料の欠如のため顧みられなかった、地上における儀式行為についても考古学的に遡及でき、葬送儀礼研究に大きく寄与している。

②豊富な未盗掘墓の存在

2005年以降、中王国・新王国の両時代の未盗掘墓が数多く発見されており、棺やミイラマスクを初めとする保存状態が良好な遺物群が出土した。遺構・遺物の出土状況は埋葬時の状態をそのままとどめているため、当時の葬送儀礼を復元する上での重要な手がかりとなっている。これらは埋葬習慣の研究における第一級の資料に位置づけられる。

③多様な社会階層によって造営された墓地であること

新王国時代の埋葬においては、トゥーム・チャペルやシャフト墓、土壌墓など墓の形態にもバラエティーがあり、副葬品の内容にも顕著な差が認められる。中王国時代はシャフト墓で構成されているが、付近のセンウセレト3世やケンジェルなど、王の葬祭複合体周辺との関係の中でとらえれば、ファラオを頂点とする階層ピラミッドの中間的な層に位置づけられる。こうした埋葬習慣に見られる差異の体系から、この地域における階層化の状況や社会の様相を看取することが可能である。

④メンフィス地域の様相解明への貢献

メンフィスは新王国時代において行政の中心であり、サッカラのホルエムヘブを初めとする高官墓の存在はそれを裏付けている。ダハシュール地域での大型のトゥーム・チャペルを有する墓域が発見されたことは、これまで新王国時代の都市メンフィスが、サッカラを中心に語られてきた状況に再考を促すものであり、高い歴史的価値を示す。少なくとも新王国時代第18王朝後期から第20王朝まで墓地として利用されており、新王国時代における埋葬習慣の変遷を追うことができる。ラメセス王朝期と呼ばれる第19、20王朝のメンフィス地域における墓の発見例は豊富とは言えないため、ダハシュール北遺跡の資料的価値は極めて高く、この時期におけるメンフィス地域の様相解明に大きく貢献することができる。

ダハシュール北遺跡はこれまでにシャフト墓だけでも120基以上発見されているが、発掘した面積はまだ遺跡全体の面積の3分の1にも満たない。以上に挙げた重要性についても、今後の研究の進展によって、改編・追加されていく可能性がある。その他、遺跡の重要性を語る項目として付け加えるならば、この遺跡が当時としては画期的な衛星リモート・センシングを利用した調査によって、発見されたという事実だろう。

2. ダハシュール北遺跡の現状と問題点

(1) 遺構

①トゥーム・チャペル

a) 「イパイ」

地上の建築は日乾煉瓦造で、残存している部分から推測される平面の規模は東西約47m、南北17mであり、盛り土によって基礎が築かれていた。遺構の構成は東から順にアプローチ、第1中庭、第2中庭、礼拝室、及びその両脇に北側室、南側室が配されている。日乾煉瓦による壁体には石灰岩製の板が表装に用いられ、レリーフが施されていたようであり、レリーフの断片が発見されている。残存している壁体は組積の最下段数段のみと考えられ、現在は壁体の周囲を現代の石灰岩ブロックで覆い、その中に砂を充填することで保護している。

第2中庭には地下へのシャフト(シャフトA)が掘られており、深さ約10mのレベルに7つの部屋(A～G室)が設けられている。この下のレベルにはもう1つ部屋が付け加えられており、H室と名付けられ、ここに「メス」と呼ばれる人物の人型石棺が置かれている。シャフトAはシャフト部分の面積が大きいこともあり、本遺跡において唯一シャフト部分に木製の階段が設けられており、歩いて地下に下りることができる。地下室の天井には崩落している箇所があり、木製の支保によって補強されている。現在シャフトは遺物の保管スペースとしても利用されており、地上部の入口には鉄の扉が設置されている。発掘調査期間以外は扉を閉め、その上をセメントで固めて保護しており、密閉に近い状態となる。

遺物保管スペースとして利用されていることから、保管環境として適切かどうかを調査するために、地下の状況に関する地質・地盤学的な観察(岩崎 2011: 126)、温湿度計測(岩崎、中川 2011)が実施された。地下室天井に見られる亀裂や剥離から、現状の安定性を確認するための調査が今後必要と判断された。

b) 「パシェドウ」

地上の建築は石灰岩で築かれており、東西約21m、南北が約10.5mであり、正面に当たる東側から順にポルティコ、塔門、中庭、礼拝室、ピラミッドによって構成される。ピラミッドを除いてタフラ(付近の岩盤の掘削を構成する泥質の石灰岩)による基礎の盛り土が築かれ、その上に石灰岩製の敷石が敷き詰められていた。

敷石の多くや石灰岩の壁体はほとんど失われているが、壁面を飾っていたレリーフや、ピラミディオンの断片が発見されている。礼拝室および中庭西側の敷石は残存状況が良好であり、露出による劣化を防ぐために木製の覆いを架けて保護している

シャフトは深さ約7mで底から西にA室、東にE室があり、A室はB～Dの3つの部屋につながっている。D室の北西側には床面の岩盤がさらに掘り下げられ、被葬者が安置されたと考えられる2つの箱状のピットが作られていた。石灰岩製の蓋石列が一部残存していたが、盗掘を受けていた。地下室は遺物の保管スペースとして利用されており、シャフト開口部には鉄扉が設けられている。地下室の天井は西奥のD室を除いて安定しておらず、しばしば崩落している。遺物は天井が安定しているD室に主に置かれている。

地下室には、「シミ」と考えられる虫が生息していることがわかっており（増澤 2011: 169, Fig.4b）、遺物を包んでいる中性紙や遺物の情報が書かれたラベルで虫害が見られ、虫食いによってラベルに記入された文字が見えなくなるなどの問題が生じていた。これはパシェドゥの地下室だけでなく、他の遺物保管スペースに用いられたシャフト墓でも同様の事例が見られた。

c) 「タ」

地上の建築はほとんど残存しておらず、南壁の基礎の壁体下部がわずかに残存しているのみである。建材は石灰岩製であり、表装と石板間にモルタルや石灰岩チップを充填する、ラメセス朝時代の特徴を有する。地業としてタフラチップを主体とする盛り土が築かれていた。このトゥーム・チャペルに属するシャフトからは柱やレリーフの断片が取り上げられており、これらを元にして遺構の復元考察が行われている（cf. 吉村、西本他 2010）。

シャフト（シャフト40）は2層になっており、開口部から深さ約5mのところまで西側にA室、そのさらに奥にB室があり、その下の層はシャフトの底から西にC室、C室の南にD室が設けられている。「タ」墓の開口部には鉄扉が取り付けられているが、中に遺物は保管されていない。

「タ」の墓の基礎となっているタフラの盛り土を一部取り除くことによって、その下から未盗掘墓が数多く発見された（シャフト42、64、65、ウイアイ、チャイの土壙墓）。残存している盛り土の周りには現在、崩落を防ぐために現代の石灰岩ブロックを積むことで保護が行われている。

②シャフト墓

a) 遺物の保管庫として使用しているもの

トゥーム・チャペルとして上部構造を持つシャフトA（イパイ）、シャフト15（パシェドゥ）以外にも、遺物の保管庫として利用されているシャフト墓として、シャフト17、シャフト23、シャフト25がある。これらのシャフトの開口部は鉄扉が設置され、施錠できるようになっており、調査期間外はセメントで封鎖されている。

b) それ以外のシャフト墓

既掘のシャフト墓については、2008年第15次調査までは開口部の上に鉄格子を架け、開口部の周囲をセメントで固めて固定していた。しかし、風によって付近のゴミがシャフト内に集積することや、犬などの動物が落ちて死体が腐敗するなどの問題があったため、2008年第16次調査からは上面を木製の蓋で覆い、周囲を石

灰岩ブロックで囲う形式となった。未完成の浅いシャフト墓に関しては、蓋はせず発掘廃土を充填して埋め戻している。

③土壙墓

既掘の土壙墓については、全て埋戻しが行われている。土壙内に入れる発掘廃土を周囲の地山と同じレベルまで充填すると土壙墓の存在が分かりにくくなるため、地表面よりも若干低い高さまで埋め、土壙墓の位置と輪郭が分かるようにしている。

(2) 遺物

①サッカラにある考古省管轄の倉庫に収蔵されているもの

発見された遺物の内、特に重要と判断されたものについては、Register Objectとして登録され、サッカラにあるエジプト考古省管轄の倉庫に収蔵される。またそれに準ずるものとしてStudy Objectがあり、同様に倉庫に収められている。倉庫では未盗掘で発見されたものを中心とする木棺やミイラマスク、木製シャブティおよび木製シャブティ・ボックスに対して保存修復作業が実施された。

②発掘現場のシャフト墓内に保管されているもの

Register Object および Study Object 以外の遺物に関しては、過去に発掘されたシャフト墓を倉庫として遺物を保管している。倉庫として利用しているのはシャフト A (イパイ墓)、シャフト 15、シャフト 17、シャフト 23、シャフト 25 の 4 か所であり、ダハシュール北遺跡で発見された中でも比較的広い地下空間を持つ墓が選択されている。

過去に倉庫として使用されているシャフト墓の環境の調査を実施した(岩崎、中川 2011)。結果として温湿度は密閉状態の場合安定していることが判明しており、湿度も 87% と極めて高いことが分かった。シャフト内の温湿度計測および遺跡の電気探査による地下構造の分析(中川、岩崎他 2011)から、深度は不明だが地下水層が存在し、上層の石灰岩層に水分を供給しており、地下室の湿度は壁の石灰岩層に含まれる水分が影響していることが推測された。また、発掘期間中にシャフトが開放状態にあると、外気の流入によって湿度が変化することが分かった。密閉状態の温湿度は安定していることから遺物の保管環境としては良好と考えられるが、発掘期間中などで解放されることによる外気流入や、人間の代謝による影響に気をつける必要がある。

③展示用に他の博物館に収蔵されているもの

Register Object の中には、展示を目的として、他博物館に送られているものがある。その内の 1 つ、未盗掘で発見されたシャフト 42 被葬者セヌウのミイラマスクはサッカラのイムホテプ博物館に展示されている。その他についてはエジプト各地の建設中の博物館に収蔵されている。

(3) その他

①アクセス

ダハシュール北遺跡へアクセスする際はダハシュール地区のチケットオフィス前から赤ピラミッドに通じている道路を西に行き、赤ピラミッドの手前(粗大ゴミ置き場の西端)から砂漠の中を北上する。赤ピラミッドへ向かう道からそれた後は舗装されておらず、通行用に砂地を整地した通り道を使用して遺跡に到達する。遺

跡は低位砂漠に比較的内奥にあり、周囲は砂漠になっているため、現在簡単にアクセスできる状況にはない。

②保護柵

遺跡の周囲はこれまでの発掘区を囲む形で東西約240m、南北約180mの範囲に渡って鉄条網が設置されている。鉄条網の支柱の高さは1.2m前後であり、水平方向に4条の鉄線が等間隔に取付けられている。下2条の鉄線の間には、野犬などの動物の侵入を防ぐためジグザグに鉄線が張られている。鉄条網は老朽化が進んでおり、また発掘廃土を遺跡の外に捨てる際の通り道を作るために、一部を発掘中だけ開放することもあるため、所々に線の欠損がある。遺構の分布は地表面からもある程度推測できるが、遺跡の北東部や西部など、鉄条網の外にも遺構の分布が認められる箇所がある。

遺跡の西には軍事エリアが隣接しており、エリアから遺跡の近傍を通過して耕地際に下りていく軍人の集団が、発掘調査中に目撃されることもしばしばある。軍人や、一般人の無用の侵入を避けるためにも保護柵の存在は重要である。

3. 保存整備計画

(1) 保存整備の基本方針

ダハシュール北遺跡の研究はまだ途上であり、推測される遺構の分布範囲から、発掘が行われたのはまだ一部に過ぎないことが明らかである。一方で、「ダハシュール北遺跡の重要性」で述べたとおり、①葬送儀礼研究への貢献、②豊富な未盗掘墓の存在、③多様な社会階層によって造営された墓地であること、④メンフィス地域の様相解明への貢献など、遺跡の学術的価値は極めて高く、今後の研究の進展が強く望まれる。したがって、遺跡の公開や活用を視野に入れた整備は今の状況では現実的ではなく、発見された遺構・遺物が失われることがないよう保護、管理しながら、調査・研究を進めていくことが先決と考えられる。また、ダハシュール北地区や南サッカラの重要な遺跡群もまだ公開が進んでおらず、今後も調査が必要な地点が数多くある。これらの遺跡群との関係や、本遺跡へのアクセスにも問題があることを考慮すると、ダハシュール北遺跡の公開については、ダハシュール北地区および南サッカラ地区の保存整備、公開と足並みをそろえる形で進めたほうがよいと考えられる。

一方で、近年のインターネットを用いた情報発信技術の向上によって、現在のインフラや遺跡の周囲の状況に関係なく、デジタル上で遺跡の情報を公開していくことは可能である。遺構、遺物のデータベースを、研究のための資料としてだけでなく、遺跡公開も視野に入れて作成し、配信するという方向性については、本研究の一環として検討された（附録1に報告されている）。遺跡においては保護に重点を置きつつ、インターネット上で情報を公開していくという保存整備は、入ることが困難な地下の遺構が大部分を占め、実際に訪れても十分な状況の把握が難しい本遺跡の特質から有効と考えられる。

以上の点を踏まえ、保存整備計画の基本方針として次の項目を設定する。

- ①発見された遺構・遺物の保護を第一とする。
- ②遺物の保存環境を改善する。
- ③遺跡景観の保全に努める。
- ④遺構・遺物のデータベース化を推進し、公開する。
- ⑤発掘調査・研究を継続的に進め、遺跡の学術的重要性への理解を深め、保存整備に活かしていく。

(2) 保存整備計画の内容

①ゾーニング計画と保護柵

ダハシュール北遺跡には前述のようにこれまでの発掘区を囲む形で鉄条網が設置されているが、鉄条網の外にも遺構の分布は認められる。これらも含め、遺構の分布が認められる範囲を遺跡ゾーンとして認定し、その周囲に保護柵を設置することが望ましい。Fig.1に現在の鉄条網の設置位置と、提案する遺跡ゾーンの範囲を示した。

ダハシュール北地区全体の保存整備が進んでいない現段階では、遺跡ゾーンの境界を明示し、無関係の人間や動物などの侵入を防ぐために、保護柵が必要と考えられる。しかし、基本方針で掲げているように、遺跡景観の保全を目指すためには、保護柵の設置にも工夫が必要である。ダハシュール北遺跡周辺では、遺構は高い所に立地する傾向があり、ワディ状に低くなっているところには遺構が見られない。この傾向を活かして、保護柵の範囲を現在より拡大し、ワディの底など、低い場所に設置することで、景観への影響を小さくすることができる。遺跡ゾーンの北側はワディ状になっており、保護柵はワディに沿って設置されるため、Fig.1のような形になる。

鉄条網は遠目には比較的目立たず、動物の侵入を防ぐことができれば十分なので、材質、高さは現状のもので良いと考えられる。ただし、網に隙間が空いていると動物に侵入されてしまうため、筋交いやジグザクによって隙間を埋める工夫が必要だろう。ダハシュール北地区の保存整備が進み、この地区全体のゾーニングと侵入防止が確立された場合には、鉄条網ではなくより丈の低い、遠目には目立たない境界に移行してもよい。

②遺構

a) トゥーム・チャペル

前述の通り、壁体などが残存している地上の構造物は3基のトゥーム・チャペルのみである。「イパイ」のトゥーム・チャペルは日乾煉瓦による壁体が残存しており、現在は壁体の周りに石灰岩の擁壁を作り、擁壁の間に砂を充填することで壁体を保護している。この方法の場合、石灰岩の擁壁が目立ってしまい、日乾煉瓦造としての特徴を示すことができない。また「パシェドウ」のトゥーム・チャペルは石灰岩による石敷きを保護するために覆い屋を架けており、状態は良好であるが、遺構の全体像をわかりにくくしてしまうだけでなく、外観を損ねてしまっている。また、全てのトゥーム・チャペルに共通するのは、壁体がタフラの盛土による基礎の上に建てられており、発掘によってこの盛土が露出したことにより、盛土部分の崩落が見られることである。盛土の崩落は壁体の破壊に直結するため、壁体そのものの保護だけでは不十分と言える。「タ」のトゥーム・チャペルはとりわけこの状況が深刻である。

盛土も古代の遺構の一部であり、壁体の保護を考えるのであれば、盛土も含めて遺構の保護を実施する必要がある。このような総合的な遺跡の保護には、キャッピングが有効と考えられる。壁体も含めて遺構全体をキャッピングによって覆ってしまい、その上に古代の遺構の平面が分かるように、現代の日乾煉瓦や石灰岩を利用して壁体の下部を立ち上げる。キャッピングに用いる材料については検討の余地があるが、エジプトの遺構に対するキャッピングはアブ・シール南丘陵遺跡において試験的に行った実績があり、参考にできる。こうすることで、遺跡の景観を守りながら、進行する崩壊を防ぐことができると考えられる。

ただし、「タ」のトゥーム・チャペルについては例外的な対処が必要である。この遺構の盛土の下から、中王国時代の未盗掘の墓であるシャフト42（セヌウ）、シャフト65（セベクハトとセネイトエス）が発見されており、キャッピングの実施によってこれらのシャフト墓が隠れてしまうからである。未盗掘墓の発見はこの遺跡の学術的価値を理解する上で重要な項目であり、また中王国時代の墓地の上に新王国時代の墓地が築かれ

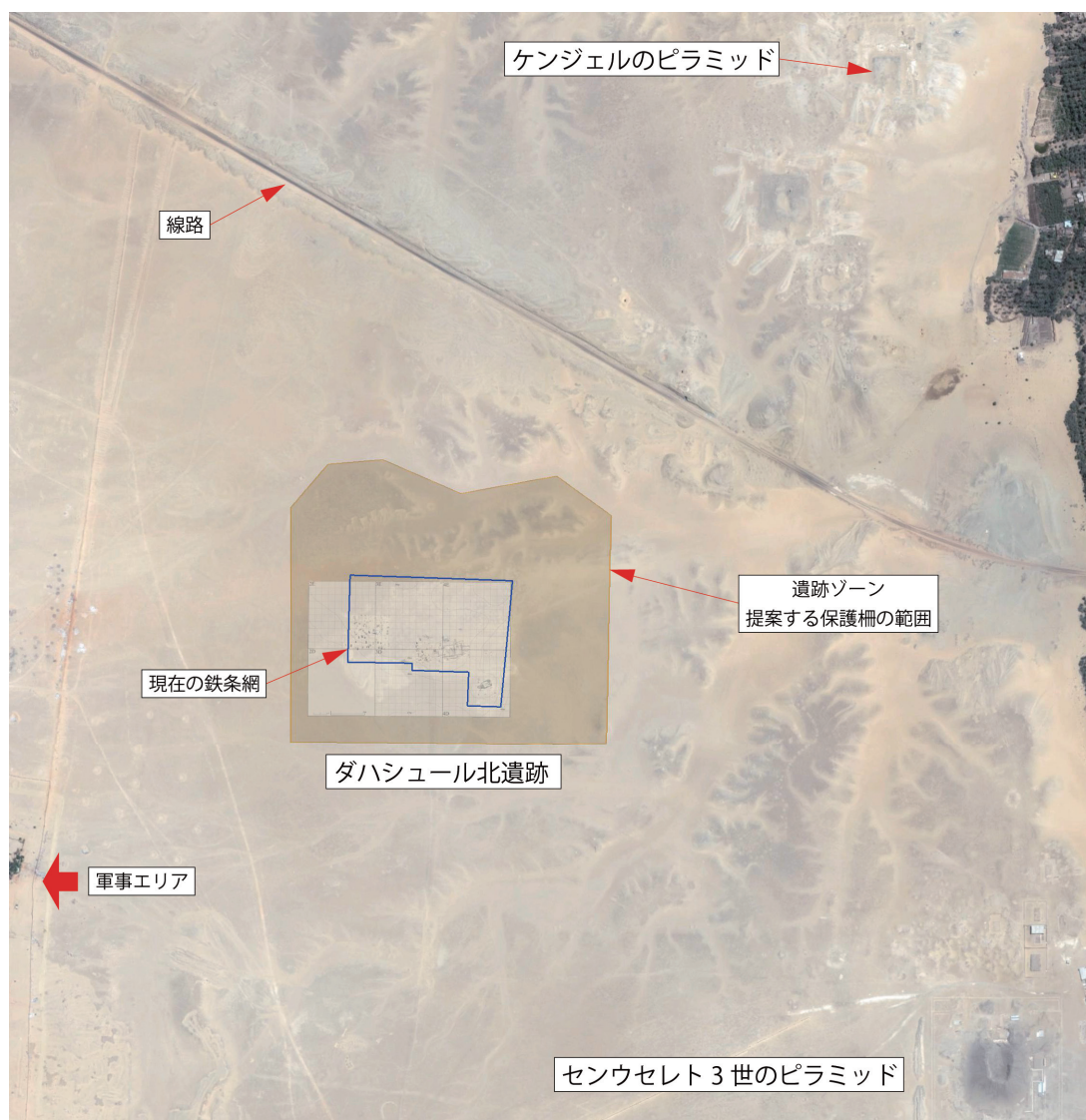


Fig.1. 現在の鉄条網の設置位置と、提案する遺跡ゾーンの範囲

ていることを端的に示す意味でも、シャフト42やシャフト65の存在を明示する形で、トゥーム・チャペルの保護が行われる必要がある。現在は「夕」のトゥーム・チャペルの盛土の周囲に石灰岩ブロックを積んで崩落を食い止めている状態であり、石灰岩ブロックの表面を盛土に近い色で塗って石灰岩が必要以上に目立つことを避け、上部にわずかに残る壁体については部分的なキャッピングを施し、その上に石材列を再現するなどの方法が考えられる。

トゥーム・チャペルの地下は後述のシャフト墓と同じだが、天井が崩落している箇所が認められるため、支保を充実させて崩落を食い止める措置が必要である。亀裂が入っている箇所については計測を通して状況の深刻度をモニタリングする必要があるだろう。

b) シャフト墓

シャフト墓は倉庫として利用しているもの（シャフト17、シャフト23、シャフト25）を除けば、発掘調査が終了した後に中に入ることはほとんどなく、鉄格子もしくは木製の蓋によって閉じられている。また、もし

将来にこの遺跡が一般に公開されたとしても、シャフト墓の多くは空間が狭く、下りるための階段や装置を付けることが難しい。梯子を使用することもできるが、その場合はヘルメットや安全のためのベルトを着用し、注視する人間が必要となるだろう。シャフト墓の形状は似通っているものが多いため、シャフト墓への下降を体験するのであれば、代表的なものだけあれば良い。したがって、多くのシャフト墓は半永久的な形で閉じてしまっても問題ないと考えられる。発掘調査と記録が完了したシャフト墓については、崩落を防ぐためにも、代表的なシャフト墓だけ残してすべて埋め戻すのが妥当な手段と考えられる。埋め戻し用の砂については、遺跡周辺に発掘廃土があるため、これを再利用する。発掘廃土は少なからず遺跡の景観を改変してしまっているため、廃土の利用は景観保全にも役立つ。

埋め戻した後の、地上の整備については、埋葬後の状況が保存されている例が皆無に近いため、問題が残る。シャフト墓の内部から建材が発見され、過去に上部構造があった可能性が指摘されているものもあるが (ex. 吉村、近藤他 2011: 58)、復元に十分な資料が得られた例はない。中王国時代のシャフト墓に関しては、未盗掘であったシャフト 65 の調査成果から、開口部を覆う形でタフラによる塚が築かれていたことが判明している。調査によって中王国時代の墓と分かっているものについては、上部に塚を復元するという整備があってもよい。地上の構造物が少なく、平坦な本遺跡において塚が並んでいる様子は、この遺跡の景観を特徴づけるものとなるだろう。地上部の遺構や活動については不明な点が多く、まさに研究の途上であり、今後の進展が保存整備に活かされていくだろう。

c) 土壇墓

浅い土壇墓はこの遺跡で数多く発見されているが、発掘を終え、一度埋もれてしまうと、場所の特定が難しく、その所在を明示することができない。風によって土壇の中にゴミがたまってしまったり、野犬の日よけとなることを避けるために、ある程度は砂で埋めているが、地面と同じレベルにはせず、わずかに低くすることで、遺構の平面の輪郭を明示する方策が現状では望ましいだろう。ただし、土壇墓の地上にも構造物が作られていたことが指摘されており (和田 2011)、今後は本遺跡での今後の発掘調査と研究の成果を踏まえて整備を改善していく必要があると思われる。

③遺物

遺物はサッカラの倉庫に収蔵されているもの、遺跡のシャフト墓に保管されているもの、展示のために各地の博物館に送られているものがあり、分散している状況にある。まずは、どこに何があってどのような状況なのか、そのデータベースを整えておく必要がある。

大部分の遺物はシャフト墓を利用した倉庫に納められており、遺物の写真撮影、実測などの整理作業を発掘現場において行うことができるため、今後調査・研究を続けていく上での作業上の利便性は高い。また、シャフト墓の温湿度の状況は安定しており、シミなどの害虫対策、地中から水分が蒸散する地面や壁への直接の設置を避けるなどの処置を行えば、保存の環境としては良好であることが分かっている。本格的な公開へは進まず、保護を優先する現段階としては、シャフト墓を整備して倉庫として利用する方法を維持する形でも大きな問題はないと考えられる。

ただし、倉庫となる地下室への遺物の出し入れは、階段が設置されているシャフト A を除いては深さ 10m 前後のシャフトの中で遺物を上昇・下降させなければならず、破損の危険が皆無とは言えない。遺物を安全に上昇・下降させるには相応の広さが必要だが、シャフト部の平面の面積が大きいシャフトは現状では限られており、今後調査を続けていく中で倉庫として有望なシャフト墓の発見が無ければ、遺跡全体としての収納スペースが限界に達してしまうことも考えられる。ダハシュール地区全体の保存整備計画の方針についても第 4 章で

報告されており、そこではダハシュール地区に特化した博物館の建設が盛り込まれた。この博物館を遺物の収蔵庫として活用することができれば、遺跡のシャフト墓の倉庫を整理途中の一時的な保管庫として利用し、整理が終了したものは博物館の倉庫に収蔵する方が理想的である。将来的には、ダハシュール地区全体の保存整備と歩調を合わせながら、遺物の収納に関する抜本的な改善を進めていくことが望ましい。

④遺構・遺物のデータベース化と公開

写真、図版などを含めた遺構・遺物の基本情報をデータベース化し、調査・研究のための基礎資料としてだけでなく、積極的な公開を実施する。

従来の遺構や遺物のデータベースはあくまで専門家向けのものが多く、研究の資料としては有用だが、一般の人々にとっては内容を理解しにくい。また、視覚的な情報が乏しいものが多いため、どの遺物がどの遺構からどのようにして出土したのか、その関係が明瞭でないことがしばしばある。遺構と遺物の関係が明瞭でないのは従来の遺跡公開でも同じことが言える。こうした問題の解決策として、アメリカ Google.inc が開発したバーチャル地球儀 Google Earth とクラウドデータベース Google Fusion Tables を組み合わせ、遺構の外観や位置関係、出土遺物のセットや出土状況を視覚的に理解しやすいデータベース公開の仕組みが研究された。詳細については本報告集附録 1 を参照してもらいたい。

現状では保存に重点が置かれた整備となり、公開・活用には力点が置かれていないが、それを補完するものとして、インターネットのデータベース公開は機能する。特にダハシュール北遺跡は遺構のほとんどが地下にあり、シャフト墓という形式上、地下室に人が下りることは設備面や安全面から見ても簡単ではなく、従来の公開方法では遺跡の特徴をうまく伝えることができない。インターネットによる視覚的にわかりやすいデータベースの公開は、地下の様子や遺物の出土状況までを情報として提供することができ、この遺跡においては特に有効に働くと考えられる。

さらに、データベースの作成は、人が実際に遺跡を訪れるような公開においても活用できる。本報告集附録 1、2 で述べられている携帯端末を用いた遺跡情報表示のシステム構築に、データベースはそのまま利用することができる。携帯端末による遺跡情報表示のメリットは、QR コードを併用することで、遺跡における看板等の乱立を避け、遺跡景観の保護に役立つことである。ダハシュール北遺跡はシャフト墓や土壇墓が密集しているため、看板等を多用した情報表示は現実的ではない。将来、遺跡に人が訪れるような公開が実現すれば、蓄積されたデータベースを有効利用することができるだろう。

4. まとめ

以上、ダハシュール北遺跡の特徴と重要性、現状と問題点および保存整備計画について述べてきた。この遺跡は古代エジプトの葬送儀礼の研究や、エジプトの中のメンフィス・ネクロポリスの位置づけを語る上で重要な学術的価値を有し、今後の研究の進展が期待される。この遺跡の中でも発掘が行われた地域はまだ一部に過ぎず、まだ研究の途上であることや、ダハシュール地区全体の遺跡整備が進んでいない現状から、残存しているものを消失から防ぎ、後世に確実に伝えるといった、遺構・遺物の開示よりも保護に力点を置いた保存整備計画が提示された。一方で、発見された遺構・遺物のデータベースを、本報告集附録 1、2 で示したように一

般の人でも理解しやすいように工夫することで、遺跡の情報をインターネット経由で公開していくことも計画として盛り込んだ。データベース化とその公開は、遺跡の研究成果を今の状況でもある程度伝えることができるだけでなく、将来遺跡に人が訪れるような公開の形になった場合、携帯端末による遺跡情報表示といった、先進の遺跡公開に応用することができる。すでにそのシステムのモデルは本研究を通して出来上がっている。

ただし、再三述べているように、ダハシュール北遺跡の研究はまだ途上にある。ここで述べられた保存整備計画は決して硬直したものではない。今後の調査を通じて、この遺跡の持つ学術的重要性、意義を再確認、修正、追加していくことを繰り返しながら、より質の高い計画へと柔軟に改変していくことが望まれる。ここで提示された計画は、今後の発展に向けた議論の礎となるものである。

註

- 1) メンフィス地域の衛星リモート・センシングによる調査、ダハシュール北遺跡における予備調査については以下を参照（吉村、近藤、長谷川他 1997; 坂田、恵多谷、吉村他 1997; 早稲田大学エジプト学研究所 2003; Yoshimura et al. 1997; Etaya et al. 2000）。
- 2) イパイのトゥーム・チャペルを中心とする第1次から第6次までの調査の概要については以下を参照（吉村、近藤、長谷川他 1998, 1999, 2000, 2001; Yoshimura et al. 1998, 1999, 2000; Yoshimura, Kondo and Hasegawa 1999; Yoshimura and Hasegawa 1999; Yoshimura and Hasegawa 2000; Hasegawa 2003）。メスの石棺については次を参照（西本、吉村、長谷川 2000）。
- 3) 第7次、第8次調査の概要については以下を参照（吉村、近藤、長谷川他 2002, 2003; Yoshimura et al. 2001）。また1997年の発掘開始から2002年までの調査をまとめたものとしては次を参照のこと（吉村、近藤、長谷川他 2004）。
- 4) 第9次調査の概要については以下を参照（吉村、近藤、長谷川他 2005）。
- 5) 第10次調査から第13次調査までの調査の概要、研究成果については、次を参照（吉村、馬場、近藤他 2009, 2010; Yoshimura et al. 2005; Yoshimura and Baba 2007; 柏木 2009）。
- 6) 第14次調査から第18次調査までの調査の概要、研究成果については、次を参照（吉村、近藤、長谷川他 2011; 吉村、近藤、矢澤他 2011; 吉村、矢澤、近藤他 2012; 吉村、矢澤、近藤他 2013）